

海外留学記

青年英語教師のアメリカ留学記

——1969年夏—— I

辻 井 榮 滋

〔留学記に寄せて〕

これまでJ・ロンドン（1876-1916）の翻訳や研究を40数年にわたって続け、『立命館経済学』にも何度も寄稿の機会を頂いてきた。

さて、人生も残り少なくなってきた昨今だが、まだロンドン研究に首を突っこむ前の高校教師の時に生まれて初めて渡米の機会を得た。そして、その2カ月間について400字詰め原稿用紙380枚ほど書き残していた。今回それが見つかり、再読してみると、若気の至りながら半世紀前の時代証言の一部にもなると確信。全4章をわかりやすいように章ごとに4回に分け、残すこととした。ベトナム戦争、アポロ11号、人種問題、家族の有りよう、有名スポット、中学・高校・大学めぐり等々、ご参考になれば幸いである。

(2017年9月吉日記)

まえがき

1969年の7月初旬、日本ではまだ雨期が明けず、じめじめとした鬱陶しい毎日が続いていた。そのつゆ空を突き破って、私はアメリカに約2ヶ月の研修の旅を試みた。一英語青年の夢であり、この夢を実現させてくれたのがEIL（日本国際生活体験協会）のプログラムであった。

それまで書物や写真集、絵はがき等々によってアメリカは私の一部になってはいた。文学、紀行、随筆などアメリカに関する書物は、私に興味ある様々な問題を提示し教えてくれた。旅行記などもかなり読んでいた。そして、それはそれで得るところがあった。しかし、読めば一層、私にもう1つ何かが欠けている感じを強くした。

今、25歳の若さでアメリカに学んだことを心からよかったと思っている。それによって欠けている何かが、不十分かも知れないが、補充されたように思えるからである。書物等によって得た知識が、ゆっくりと身についていくような気がする。書物によって、アメリカ全般について、あるいは黒人のこと、あるいは大学問題、またあるいは南部、あるいは東部、あるいはアメリカ経済……と、内容が少しずつ異なる。しかし、どの書物にも、他の書物にはない個々の著者のユニークな体験が述べられていて、尊いと思う。

私も25歳の目で新鮮な体験を綴っていきたい。仕事上「英語研修」というプログラムを選んだが、まる2ヶ月学校の中に籠詰めにされていたのではない。学校とホーム・ステイ（家庭滞在）

と観光旅行の3本立てのスケジュールで、どれも私にとって興味あふれるものばかりであった。読者諸氏にとって、あるいは珍しくない体験もあるかも知れないし、新しいものもあるかも知れない。堅苦しい教師の目ばかりでなく、一日本青年の目をも通して、自由にいろいろな角度から描いてみたい。ともかく現代アメリカの厳しい現実を注視しつつ、「アメリカの顔」の1つでも描くことができればこの上もない喜びである。

最後に、このプログラムを与えてくれた EIL と、この旅に許可を頂いた京都府教育委員会に厚く御礼申し上げたい。そしてこの小著を、私の旅の無事を祈り、留守を守ってくれた妻と、ホーム・ステイでこの上ないお世話になったフレッド・P・ジョンストン夫妻、それに S・I・T のジム・ライオンズ先生に献げることをお許し願いたい。

目次

I. プラトルボロのキャンパスから

出発／アラスカ—ニューヨーク／一路ヴァーモントへ／アメリカの軽井沢／オリエンテーション／サンデー／グループ・セヴン入門／ジョンの講義から／プラトルボロの街／ジムのこと／嬉しい便り／ボストンへの旅／フェアウェル・パーティ／ジムへの同情／ファイナル・イグザムと修了証書授与式

II. リトル・アウティング——ニューヨークとワシントンの絵はがき

再び黒人問題に思う／夜のマンハッタン／ニューヨーク観光—その1／ニューヨーク観光—その2／ニューヨーク観光—その3／資本主義の谷間／首都ワシントンに向けて／車で巡るワシントン／タイダル・ベイソンの辺りにて／キャピトルとホワイト・ハウス／ユニオン駅にて／ワシントン雑感

III. 中西部から——イリノイの夏

夜を越えて／感激の対面／クインシーへの誘い／マクワインタイア一家とフェア／ハニバル・タウン／クインシーあれこれ／州部スプリングフィールドとリンカン／市役所訪問／シカゴの美術・博物館巡りから／スター・マーケット／シカゴ・トリビューンと WGN／ゲイルのこと／フレッドの商用旅行／エマソン中学とイリノイ大学を訪ねて／レイクサイド・ドライブ／リバティヴィル高等学校／ピクニック／日曜礼拝とストックヤード／ホワイトソックス対ヤンキース／フェアウェル・パーティ／パークリッジ雑感

IV. 帰途の旅——大西部を越えて

別れの時／太陽を追って／シャイアン——デンヴァー／ニューメキシコに行く／グランド・キャニオン／一路サンフランシスコへ／チンチン電車と坂の街

I. プラトルポーロのキャンパスから

●出発

誰もが一度は夢見た、あるいは夢見ている空の旅、ジェット機の旅、その旅がこんなにも素晴らしいものだったとは……書き出しからこんな子供じみた文句を、とお叱りを受けるかも知れない。だが、私は気取りたくない。これまで何度も空の旅を経験している人たちと違って、私にはそもそも出発から新鮮なのだ。なるほど空の時代であり、飛行機を利用したことのある人の数も相当なはずだ。しかし私は、これまでの旅行記があまり書いたことのない、そもそもの出発の新鮮さから書いてみたい。空の旅を経験したことのない多くの人たちには、わずかに早く初体験をした者の感動を知ってもらいたいし、常時利用者には、初めてジェット機で飛んだ際の新鮮な感動を共有していただきたい。

WAWのチャーター機は予定より大分遅れて午後6時に羽田を飛び立った。滑走路の出発点に立つやいなや、急にジェット・エンジンの音が高鳴り、同時にものすごいスピードで滑走し始める。自動車が停止状態から加速する時のあのスピード感など全くお話にならない。二重になった小さな丸窓を通して、空港ビルや他の飛行機が恐ろしいスピードで飛び去るのが見える。そして離陸する直前のあの手に汗握る不安と期待感は、初めて空の旅を体験する者が味わう醍醐味であろう。さらには、あれだけの荷物、あれだけの乗客を乗せた巨体がよくも大空に舞い上がるものだとつくづく思う。高校の物理で揚力とかについて学習したには違いないのだが、実際その場に直面してみると、理論や理屈で割り切れなくなり、特に私のようにその方面にうとい人間には、ただ不思議にばかり思えるのだ。

離陸の瞬間にはやはり手に汗を握る。そのまま離陸せずに東京湾に突っ込むのではないかと不安を感じたのも、初めて体験する者の取り越し苦労であった。梅雨の鬱陶しい天候のために、東京上空には夕暮れが急ぎ来ていた。

大東京の上空に舞い上がり、さらに上昇を続ける飛行機からその街並みを手に取るように眼下を見おろした時、これまで何百万人となく外国に旅しただろう人たちと同様、やはり大きな感動が私の胸にも響いてきた。羽田も国立競技場も東京タワーも、皆小さく美しく見えた。

やがて私たちは厚い雨期の雲を突き抜けて、広大な雲海の上に出た。この一瞬から、二度と梅雨の鬱陶しさに煩わされることもなかった。暑い日差しが窓一杯に飛び込んで来る。空は吸い込まれんばかりの青さ、下界の人たちに何となく申し訳ないような晴れやかさである。スモッグなど全く嘘のようだ。

この雲海の上に出ることによって、私はいよいよ日本とのしばしの別れを思った。同時に昨日の新幹線京都駅の乗り場を思い起こした。見送りに来てくれた者のうち、特に母と妻が、私の乗り込んだ「こだま」の発車ベルが鳴るか鳴らないうちに涙を流していた。だが、その声はもう私の耳まで届かなかった。……

離陸してしばらくは揺れたが、もうこんなに上空を飛ぶようになると、新幹線の揺れよりはるかに小さい。メモのペンが執れるぐらいだから。

雨期の日本では到底望むべくもない夕日や夕焼けも、この上空では見る事ができた。真っ赤に燃えた太陽が、雲海の彼方にゆっくりと沈んで行く。空も雲も真っ赤に染まっている光景は、特筆に値するものであろう。

1時間ほどして7時頃から夕食が出た。日本の味が多分に残されていた。羽田を立つ時にはもう2ヵ月間日本食ともお別れだと諦めていただけに、それは嬉しかった。きゅうりや大根の漬け物、紅しょうが、米（これはすでに「御飯」ではなく油炒めのパサパサ）、パン、シュークリーム、エビ、豚カツ、コーヒーなどであった。

初めのうちは黙っていたが、やがて隣りや後部の席の人たちとも語り始めた。プログラムの種類は違うが、皆EILの参加者で、アメリカ生活を体験しようとする者ばかりである。私より若い大学生たちの姿ばかりが目につく。私の席は窓ぎわで、右隣りは二十歳の青山学院3回生の女子で、カナダに行くのだという。その隣りは中央大3回生の男子学生で、彼は個人で基金によってアメリカへ行くのだという。全くバラエティに富んでいる。そしてどの顔も若い。社長の令息や重役の令嬢といった人たちも多く、学生時代からアルバイトをしてこのプログラムに参加した私などとは違うのである。自分で稼いで参加した学生などあまり見当たらない。中には、来年はヨーロッパへ行って来たいなんて息巻いている者もいた。そんな余裕のない私には全く羨ましいことであった。

岡山商大のある先生と英語で語り始める。もうそろそろ日本語を捨てて英語を口にした方がいいのだが、乗客のほとんどが日本人とあっては、どうもきまりが悪い。スチューアデスと数人の乗客がアメリカ人で、あとは大体日本人である。しかし英語研修で渡米するのだから、たとえ日本人同士であっても、できるだけ英語を使わねばと自分に言い聞かせ、先生とやり始めるのだが、お互いにどうもうまくいかない。必要感の欠如は最大のマイナスである。

スチューアデスの案内によると、アンカレッジまで約7時間、さらにアンカレッジからニューヨークまでは5時間くらいだという。高度ももう3万2千フィート（約1万メートル）だと教えてくれる。これが機内のアメリカ人と英語で話した最初であった。これまで何十人というアメリカ人に教えを受けたり話したりしたけれど、それらの体験から来る多少の自信もすっかり消えて、全く新しい気持ちになっていたもので、やはり緊張感は隠せなかった。

10時頃になると、隣りや後部席、あるいは他のメンバーたちにも慣れ、言葉もやがて自然と英語に変わっていった。小さな丸窓の外を覗くと真っ暗で、星が2つ3つ見えるだけであった。

日本時間で夜の10時を過ぎる頃から徐々に空が白み始めた。日本ではもうそろそろ寝ようかというところだろうか。いつの時でもそうだが旅に出ると、なかなか眠れない。というより眠らないといった方が当たっているかも知れない。そしてその結果は、目が充血して痛みを覚えるのが関の山なのである。この時も私は興奮のためにそういう状態にあった。しかも時が刻々と経つにつれ、外界は明るさを増していった。北極圏に近づいたのである。

日本時間で夜の11時15分、なのに外は全く明るい。北海道でも九州でも時差の変わらぬ日本を出たことのない人間には、時の変更に意外と戸惑う。（以後の旅でも何度もそういう経験をしたことであった。）窓から見おろすと、一面白く光る灰色の雲海が延々と広がっている。その波打つよう

な雲は、海の波と錯覚するほどである。陽光がこの雲海に美しい艶つやを与えているのである。あの雲海に落下して行ったら……海に飛び込んだ時のあの水しぶきの音が聞こえるようである。この変化のない雲海の上を飛行する時、一体飛行機が飛んでいるのかいないのか一瞬疑う。雲海の上空何千メートルには雲など全く見えないし、しかも雲海が実際には、はるか眼下にあって、後ろへと消えていくのが実に遅いものだから、飛行機は静止しているのではないかと目を疑うのである。だが実際は、時速900キロの猛スピードでアンカレッジを目指しているのだ。

●アラスカ——ニューヨーク

アンカレッジでは朝であった。時差と地球の大きさを感じた。眼下はるかに真っ白な雪を頂いたアラスカの峰々が見え始め、やがて飛行機は降下を始め、耳は圧迫感を覚える。

現地時間で7月3日午前6時40分にアンカレッジに着いた。ここでは時間が日本とは1日近く違うので、ずいぶん長く7月3日を経験することになる。税関を通過してロビーのみやげ物を物色する程度で、1時間半余りは瞬間に過ぎてしまった。アラスカに着いたというので、珍しいみやげ物にすでに何ドルも使う者もあった。

やがて給油と点検の終わった飛行機は、私たちを乗せてニューヨークに向かった。ほんのわずかな立ち寄りではあったが、私にとってアラスカでの1時間半余りは貴重であった。空港近辺は原始森が多く淋しい感じだ。森林地帯の中に切り開かれたただっ広い空港と言っていいただろう。夏ではあっても、アラスカと聞くとどんなに寒いのだろうと思っていたが、早朝にもかかわらず少々涼しい程度であった。

羽田から離陸する際のあの最初の不安は、もうこの時には半減していた。いつでも、最初の体験がやはり新鮮なのである。東京の梅雨空のようにどんよりと曇ってはいなかったので、アンカレッジの市街が一望のもとに手に取れた。予期していたよりはずっと大きく、整然と区画された住宅街が美しい。そしてこの市街地の周囲を広漠たる森林が埋め尽くし、その敷き詰められた緑の絨毯じゅうたんにアクセントをつけるかのように美しい小湖が散在している。長く厳しい冬を耐えるアラスカ魂とこの森林の豊庫を思う時、私にはアラスカの未来が確実に明るかった。

アンカレッジを立って30分、また白い尾根がはるか眼下にしばらく続く。ロッキーやまなみの山脈であろうか。雄大そのものである。再び時速900キロで飛んでいる。ニューヨークまで6時間40分ほどらしい。

日本時間で4日の午前3時25分、機内での朝食を終えた。もう日本食のかおりは全く嗅ぎ出せなかった。パン（苺ジャム、バター付き）、コーヒー、ベイクド・ハム、レモンジュース、卵巻きなどで、どちらかと言えば和食好みの私には早くも御飯や漬け物が恋しかった。今のような食事はかなり脂っこくて、これから先、私には合うだろうかと少々不安に思ったりもした。

ようやくニューヨークのケネディ国際空港に近づいた。着陸30分くらい前から急降下し始めると、若い女の子たちが数人次々に胸を悪くして、吐いたりする者もあった。私も、もう10分余計に飛んでいたら吐いたかも知れない。ニューヨークの上空も厚い雲がおおっていて、降下や着陸が意外と難しかったのであろう。ニューヨーク到着時刻はかなり遅れ、現地時間で午後9時40分であった。外はもう真っ暗で、従って「さあニューヨークに着いたぞ！」という実感はすぐには

湧いてこなかった。青や赤の小さなランプを点滅させながら大型ジェット機がいくつも止まっており、ぼんやりとではあるが広大な飛行場が目に入ると、それでも徐々に興奮が高まっていった。

空港のポーターや荷物係などは黒人が多く、夜の、しかも大勢の黒人たちに初めて接し、正直言って少々無気味であった。チェックが終わってロビーに出ると、もう10時前だというのに、身動きのとれないほど多くの人たち——雑多なアメリカ人——がいる。これまで知識としてしか所持していなかった「人種のるつぼ」が、この時私のものとなった。通りに出ても、街行く人たちの数がずいぶん目立つ。私は、明日の金曜日がインディペンデンス・デイ（独立記念日）で、金、土、日と3連休であることをまもなく思い出したのであった。

10時20分にチャーター・バスが来て、空港からホテルへ物すごいスピードで直行した。ネオンがことのほか美しい。大きな色とりどりのネオン文字に好奇心をかき立てられて、その英語を盛んにメモするのだった。夜のニューヨークを快走するバスの中で、私の心は不安と期待で一杯であった。

かなりの距離を走ると、やがてバスはビルの深い谷間へと入っていた。11時5分、さすがに静まり返った谷間の通りに面した、あるホテルの前に止まった。そこが宿舎ペン・ガーデン・ホテル（Penn Garden Hotel）であった。バスが止まる少し前に、夜空に高くくっきりと照らし出された世界のエンパイア・ステイト・ビルが私たちを見おろしているのをちらっと見た時、私はニューヨークに着いたという最初の感動を持ったのだった。

ホテルの前でバスを降りた時、何十階ものビルの群れがまず私を圧倒した。すでに真夜中に近く、ライトも少なくなっていたので、それらの巨大な暗黒の塊^{かたまり}は、セヴンス・アヴェニューを挟んで両側から私を押し潰してしまいそうな、そんな深い谷を形作っていた。

ニューヨークに着いたこの夜ほど、日本の旅館がいかに便利で都合がよいかということを知ったことはなかった。というのは、ホテルに着いたのが11時過ぎ、ホテルでは夕食は出されないし、近くの店ももう閉まっているし、おまけに明日の起床が6時半なので、気ばかり焦るのだった。結局、ホテルのコーヒー・ハウスでフルーツ・カップを口にただけに留まった。今から思えば、もっと気前よく食事していればよかったのだが、初めての旅は、ドルの使い方^しに関して私をひどく神経質にできてしまっていたのだ。1泊2食付き△△円という日本の旅館^{しの}が僥^いばれてならなかった。

●一路ヴァーモントへ

夕べ貧しい夕食で空腹を満たして（?）、シャワーを浴び、床に入ったのが2時半だから4時間ほどしか眠っておらず、長い空の旅のあとだけに、疲労の色は隠せなかった。テレビのスイッチをひねると、独立記念日のことをやっている。睡眠不足など構ってられない。賑やかな独立記念日のことや、きょうのバスの旅の終着地ヴァーモント州ブラトルボーロ（Brattleboro）のことを思うと、再び興奮を刺激して、睡眠不足による気だるさが少しは回復するような気がした。

ところで、私の参加したプログラムのグループ・メンバーを簡単に紹介しておかねばならない。昨日の飛行機は、アメリカ及びカナダに行く人たち百数十名を乗せてニューヨークまでやって来たが、飛行機を降りると、プログラムの内容によって、メンバーはそれぞれグループごとに各地に散って行くのである。そして8月29日に再びオークランド空港で合流して、帰国の途につくこ

とになっている。私の所属する英語研修グループは11名から成り、その大半は東大、慶応、東洋、成城等々の学生で、岡山県の中学の先生S氏（38歳）と、金沢で学習塾の講師をしておられるM夫人（33歳）と私の3人がいわば教育関係者で、年齢も他の学生諸君とはかなりの隔たりがあった。無論、これらのメンバーとはこの機会を通じて知り合ったのであり、それ以前には全く面識がなかった。しかも年齢や考え方も違うので、自由行動の際などはやはり、S先生とM夫人と私の3人がよく一緒になったものであった。

さて私たちは8時過ぎにホテルを出た。研修が終わって観光旅行をする際に、再びこのホテルに厄介になるはずである。メンバー11名はタクシー3台に分乗して、有名なポート・オーソリテイ・バス・ターミナル（Port Authority Bus Terminal）へと向かった。ケネディ空港に着いた昨夜のあの曇天とは打って変わって見事に晴れ上がり、高層ビルの谷間にもすがすがしさが生きていた。

「よいお天気になったね」

私は気さくに運転手に声をかけた。すると、「ええ、全くで。夕べはひどい雷雨でしたね。……」

と、運転手は夕べの空模様を話してくれた。私たちがベッドに入ってから後のことらしい。疲れてすっかり寝入っており、しかも窓も閉まっていたので、雷雨のことなど全く知らずじまいであった。そう言えば、飛行機を降りたニューヨークの空はどんよりと曇って、今にも一降り来そうな気配ではあった。それにしても、あの憂鬱な日本の梅雨空を思い起こさせた夕べの厚い雲など跡形もなく散って、今やアメリカ生活第1日にふさわしい上天気となったことは幸いである。曇天や雨の日にはそれほどでもないのに、染み入るような青空の下では、どんな光景もわれわれ旅人に何と素晴らしい訴え方をしてくれることであろうか。

バス・ターミナルには、独立記念日と週末が重なって旅行やホーム・タウンに帰る人たちが溢れていた。この非常に大きなターミナルがいっぱいになるのだから、よほどの人である。ずいぶん並んで待って、11時過ぎにようやく待望のグレイハウンドに乗った。何度も耳にしたり写真で見たあのバスである。なるほど日本のバスとは大分違う。車体の大きさと安定感・スピード・快適さ（リクライニング・シート）・便利さ（トイレ付き）等、その利点を挙げれば切りがない。それらについては、これからもこのバスにはずっとお世話になるので、また折々に書いてみるつもりである。

バスは、ターミナルのあるフォーティース（40番）・ストリートからエイス（8番）・アヴェニューを通り、赤茶けた古いレンガ造りの建物が並ぶブロードウェイに出る。そしてやがてニューヨーク・ヤンキーズのホーム・パーク、ヤンキー・スタジアムに差し掛かる。そこには“CLEV two games today 1:00pm”とサインが出ていた。祭日なのでダブル・ヘッダーというわけだ。マンハッタンの繁華街を離れると、イースト・リヴァー沿いにずいぶんと巨大なアパートが林立している。赤いレンガ造りのものが多く、その数・その大きさには全く圧倒されてしまう。

道路も片側3車線で、時速制限が50マイル（80キロ）とある。アメリカを訪れた日本人が異口同音に必ず感嘆するのは、この国の道路の発達ぶりだと承知していたが、百聞は一見にしかず、日本の道路事情がまことに恨めしい。ことに私は日本の地方の道路事情をいやというほど知っているだけに、なおさら羨ましく思ったことであった。やがて時速制限が60マイル（90キロ）に上

がる。もう高層建築は見えなくなり、あの大ニューヨークの巨大建築群は嘘のように、緑の自然が蘇る。白い国道が無限に延びており、色とりどりのスポーツカーや乗用車やハウス・トレイラーなどが数珠つなぎになってわれわれの前後を快走する光景もスリリングである。

「そうね、独立記念日には、皆たいていピクニックだとか海辺に行くわね。」

私の隣りに乗り合わせた、薄い色のサングラスをかけた初老の婦人がそう説明してくれた。そう言えば、バスは大西洋岸沿いを疾走しており、この付近には泳ぐところがいくらかもあるのだ。

スタンフォードやフェアフィールドという小さな町を通り過ぎ、やがてコネティカット州に入った。1時にブリッジポートに着いたが、このあたりは片側4車線の立派な道路である。あとは2時15分にコネティカット州の州都ハートフォードとスプリングフィールドに止まり、そしてその次の停車地がいよいよ目的地プラトルボーロだ。日本のバスなら5分、10分置きくらいに停車するが、グレイハウンドは長距離バスだから、少なくとも1時間、長くなると2時間も3時間も走り続ける。ちょうど新幹線の「ひかり」のようなものであろうか。

運転手がマイクを取り出して、プラトルボーロの近づいたことを告げた。グレイハウンドには車掌がない（観光バスは別だが）。運転手が手元のハンドルを操作すると、ドアは自動的に開く、いわゆる日本でも最近多くなったワンマンカーだ。車掌の必要は全くないのである。観光バスのガイド嬢のように案内するわけでもないし、3時間も4時間もただドアの開閉のためのみ乗車するというのも、確かにナンセンスな話ではある。日本ではワンマンカーの登場にずいぶん賛否両論が出て、各地でかなりの論議を呼び起こしたものだが、アメリカの場合はほとんど抵抗もなくワンマンカーを受け容れることができるように思う。

さて4時20分に、バスはとある田舎のガソリン・スタンドの前に停車した。白い道が走っているだけで、あとはほとんど町らしい影すら見当たらない。そんなところに私たちを降ろすと、バスはまたいずこともなく疾走の旅を続けて行った。ずいぶん田舎に来ているということだけは確かであった。ここが私たちの目指してはるばるやって来たプラトルボーロのバス・ストップとは、ちょっと意外であった。しかし、ヴァーモント州に来ていることだけは事実である。いやヴァーモント州自体が、美しい自然を擁するニュー・イングランドの一部なのだ。だから、田舎であることに驚く必要もないのである。そう思うと、この夏の緑濃い、美しいヴァーモントの野山が急に近しいものに思え、空気が、東京やニューヨークのそれと全く違うものであることに気づいた。サラッと乾いた、実に爽やかな、しかも新鮮な匂いのする空気なのだ。

出迎えてくれた黄色いスクールバスに乗って、私たちは学校へと急いだ。町が見えるどころか、バスは緑の匂い濃い山深く登って行った。

●アメリカの軽井沢

バスはまもなく舗装が切れてなくなった細い山道を、エンジンの音を高めて登って行く。こもれ日が窓ガラスを通して光る時、何となく涼感が肌に伝わって来た。こんな山奥に一体学校などあるのだろうか、と疑わざるを得ないほど、木立やせせらぎの冷たさが快いのである。

両側を林の茂る急な坂道をようやく登り切ると、パァーッと夏の日差しが蘇った。あのバス停から約2マイル（3キロ余り）、バスはようやく開けた土地を見いだしたのだ。かなりの高地である。快晴で雲1つないのに、日差しをそんなに暑く感じない。それどころか、むしろ肌寒いと言

った方が当たっているだろう。無論、ブラトルボーロを地図で見ると、北緯43度くらいで、ちょうど日本で言えば札幌や釧路あたりになるから、涼しいのも当然と言えるが。ちょうど日本の晩夏から初秋にかけての気候である（もっとも、日本のように暑苦しいという感じは全くない）。

バスは、私たちをキャンパスの最南端に位置するズィーズ・ハウス（Zee's House）という寮の前で降ろした。それは、白く塗られた2階建ての小ざっぱりとした学生寮であった。裏側には、この建物よりはるかに高く木々が茂っている。そして涼風が時々これらの繁茂する木々の間を吹き抜ける時、ザーツという音を残して行く。私は指定された部屋に落ち着き、しばらくベッドに横になって、思い切り手足を伸ばし、そこに5時間余りの長旅の疲れを感じ取った……。何も聞こえない。外にいとそれほどでもないが、こうして室内にいと寒いくらいである。もうここには秋が忍び来ているようだ。

6時から夕食だというので、私はルーム・メイトになったS先生と、指示された広大なキャンパス内にあるキャリッジ・ハウス（Carriage House）という食堂へと散歩がてら歩いた。寮からこの食堂まで約300メートルくらいあるだろう。その間ずっとゆるやかな坂道で、道の両側には大小の木々が青々と茂っている。寮から通用門までは舗装されておらず、通用門からあとキャンパス内の主要な道路はほとんど舗装されている。（この300メートルばかりの坂道を、私たちは20日ばかり講義や食事に通ったのであった。そのゆるやかな坂道は、そのまま私の心理を体現しているようであった。というのは、朝勉強に向かう時はこの道が厳しい勉強の前兆となり、夕方寮にもどる時は開放感に満ちた楽しい下り坂であったからである。）何と緑が豊富であろう。この時ほど私は緑樹の必要性を感じたことがない。日本の大学構内の多くが狭苦しい灰色であることを思う時、この豊富な緑の存在は、そこに学ぶ学生にとって全く貴重なものだと痛感する。夏の空の大樹の優しく包み込むような青さ、新鮮さを象徴するような緑の草木、それらは私の心を確実に慰めてくれた。

キャリッジ・ハウスはかなり大きな、これも白い建物であった。ここに集まって食事を共にする学生は、アメリカはもとより、東南アジア、中南米など各国から来ていて、実に国際色豊かである。セルフ・サービスになっており、学生は並んで順番に、自分の欲しいと思う食べ物を自分の欲しい量だけ取って、テーブルに持って行って食べるのである。よく冷えたミルクやコーヒーや紅茶も飲み放題である。全く有り難いことだ。しかもそれらを飲む時も、全て紙コップで、一度使用すれば捨ててしまうという消費王国にふさわしいものである。昨夜から満足な食事をしていなかったので、この夕食は非常に満腹感をもたらした。食堂内は、若い学生たちで大賑わいである。板壁には学生たちが祖国から持参したのか、ちょうど国鉄のポスターほどの大きさの各国のポスターが色とりどりに貼ってある。ブラジル、ボリヴィア、メキシコ、コロンビア、中華民国、タイ、チリ、パナマ、……。まだ彼らを知らないが、そのうちにこのSIT（School for International Training）での生活が興味ある素晴らしいものになるだろう（後述するが、このキャリッジ・ハウスでは、その後いろいろと楽しい思い出を持った）。

夕食を終えて、いったん寮にもどった。静かだ……。こおろぎが鳴いている。小鳥のさえずりもまことに爽やかである。夜の7時半過ぎだというのに、まだまだ明るい。日本で言えば、4時か5時頃の明るさである。おまけに清涼感は抜群で、まさにアメリカの軽井沢か上高地である。こんな恵まれた環境にある学校で英語の勉強ができる私は幸せだと思う。

カッターと靴下の洗濯を済まして、再びキャンパスへ行き、皆と一緒にバレーコート

(Volleyball Field) でバレーボールに興じた。他の留学生たちともすぐに打ち解けられた。私のサーヴはここでは断然(?) 光っていた。日本のバレーボールのことは彼らもよく知っていた。私のチームには黒人の学生も入っていた。彼は陽気で、私もよく彼をからかった。一瞬、黒人差別に対する義憤が頭を擡げた。(そしてそれは、その後徐々に大きな高まりを示していった。)

汗びっしょりになって、気がついたらもうあたりは暗くなり始めていた。ふと時計を見ると、もう9時であった。サマー・タイムで、このあたりでは9時を過ぎてようやく夜なのである。流した汗も快く、涼風に体をまかせながら、例の坂道を寮への帰路についた。ふと小さな光るものが飛んでいるのが信じ難く目に入った。蛍だった。しかもよく見ると、かなりの数の蛍が飛び交っているのではないか！ 蛍の風情といった、いわゆる日本的なものなどアメリカにはないと思っていただけに、それは私にとって驚きであり、また大きな喜びでもあった。しかも、何と多くいることであろう。日本では農薬などによって、近年めっきり減ってしまった蛍。それがこのプラトルボーロでは、農薬にも煩わされることなく悠然と生きているのである。バレーボールで流した汗は、涼風とこの蛍とが拭い取ってくれたのであった。

●オリエンテーション

学校の土曜日は休みである。けれどもこの日、私たち日本人グループのために、特別のオリエンテーションがあった。

食堂へ向かう途中の道は風が強く、少々寒いほどであった。ヴァーモントの空は真っ青に晴れ渡っているのに、まるで夏らしくない気候なのである。日本の蒸し暑い夏とは雲泥の差があるかのようだ。

朝食は、トースト・パン(何枚でもいい)、バター、いちごジャム、マーマレード、目玉焼き、レモンジュース、それにミルクだった。ミルクをもっと飲もうと思ったが、とても冷えていて、紙コップ1杯飲むのがやっとであった。

9時からいよいよオリエンテーションが行なわれた。一般にメイン・ハウス(Main House)と呼ばれている、いわゆる本館がその集合場所である(正式にはAdministration Buildingという)。これも白い清楚な感じの2階建て(一部3階、地下1階)の建物である。キャンパスの中心であり、郵便物の取り扱い、切手類の販売、事務手続き等々は一切ここでなされる。娯楽室(ホール、ステレオ、卓球など)もここにある。このメイン・ハウスの一室に私たち23名(日本の英語研修のもう1つのグループ12名を含む)が一堂に会した。

ボブ・ネルソン(Mr. Bob Nelson)とドナルド・イートン(Mr. Donald Eaton)という若い先生が、日本人グループの担当教師となった。ボブはやせ型で、金髪・独身、一方、ドン(=ドナルドの愛称)はやや肥満型で、髪は褐色、1児の父である。以下は、この2人がオリエンテーションと称して私たちに与えた断片的な知識である。

まず、留学生の最も関心のある郵便物に関連する切手については、このメイン・ハウスで毎日12時半から1時と、3時から3時半までの2回販売される(その後私は、日本の恩師や友人や家族に送る絵はがきや切手、エアグラムなどをここで再々買ったものである)。それから食事については、例のキャリッジ・ハウスで、朝食が7時半から8時(ただし日曜日は8時から10時)まで、昼食が12時から12時半まで、夕食は6時から6時半までということである。また、プラトルボーロの街まで

はかなり遠い（約3マイル）ので、火曜日と金曜日の各々4時にキャリッジ・ハウスの前からスクールバスが出ており、学生たちはその際にバスに乗り込んで、買物やクリーニングや気晴らしに出かけて行くという。さらに話はダウン・タウンのことにまで及び、銀行がいくつあって何時から何時まで開いているとか、映画館は2つあるとか……かなり詳しく説明してくれた。なお、映画はキャンパスでも、毎水曜日の夜8時からキャリッジ・ハウスでやっているらしい。健康管理にも気を配っていて、休日を除いて毎朝8時半から9時まで医師が巡回して来るという。……ボブとドンの説明は、およそこんなものだったと思う。

アメリカに留学した日本人の手記や体験記を読むと、異口同音にヒアリングの難解さが述べられているが、全くその通りで、私も最初大いに困惑して、今後の語学研修に不安を抱いたが、しかし意識を集中して聴けば、あとは場数を踏むに従って、徐々にその苦痛も癒やされていくものだったということを知った。ボブとドンの説明には、そんなわけで必死に意識を集中させたことであつた。

明後日、月曜日にクラス分けのための試験が実施されることを予告され、オリエンテーションはすっかり終わった。このあと、ボブとドンによって、私たちはキャンパスを案内された。メイン・ハウスからワット・ライブラリという図書館までの道路の東側はゆるやかな起伏を持った緑の草地になっている（その後、この草地に腰を下ろしたり、横になったりしながら、夕食のあとなどよく日が暮れるまで、他の留学生たちと談笑に耽ったものである）。ここには林檎の木もかなり植わっている。

いくつかの寮の前を通り過ぎると、もう林の中の小道となる。もちろん舗装されていない。そしてしばらく歩き続けると、池に出る。何と広大なキャンパス、しかも何と自然美の豊富なことだろう。日本のキャンパスなら、まず大学があり、お備え程度に草木が添えられているという感じだが、ここにはまず自然があり、その中に学校があるのだ。つまり、野山の中に私たち自身を見いだすのである。（無論、アメリカの大学も、すべてがこのような環境にあるわけではない。ニューヨークやシカゴ等々の大都市の大学には日本と似たり寄つたりのものもある。）

野辺に咲く名も知らぬ花々が涼しいここヴァーモントのキャンパスで、月曜日から厳しい語学研修が始まるのである。

●サンデー

何とここは空気が爽やかなのだらう。戸外は太陽が明るく、空も真っ青なのに、汗など全くかかないのだ。小鳥たちの声も澄み切った響きを伝えて来る。

明日からの始業を前にして、何となく不安と期待とが交錯する中を、学校から遊泳に連れて行くこうとの誘いがかかり、私たちは大はしゃぎをしたのであつた。例のスクールバスが遊泳準備のできた私たちを乗せて、美しいヴァーモントの野山の間を縫って走る州道を30分ばかり遠出した。そして、やがて木立の涼しい山道の傍らに止まった。そこはワット・ポンド（Watt Pond）と立て札の立てられたS・I・Tの所有地で、美しく咲き誇るマーガレットや緑濃い山中の池の美しさは非常に印象的で、私の心に今も爽やかに残っている。ここで2時間ほど、泳いだり、写真を撮ったり、他のメンバーたちと談笑したりした。澄み切った空気、快晴の空、木々の匂いのぶんぶんする山の風、それらはすべて新鮮そのものであつた。私はこんなに新鮮な、しかも凌ぎやす

い夏を過ごすのは初めてである。日本でも有数の酷暑を誇る（？）京都しかあまり知らない私にとって、それは驚くべきことであった。そしてまた逆に、この土地の真冬の厳しさも想像してみるのはたやすいことであった。（当地の気候については、また触れることになる。）

わずか3日ではあったが、同じエクスペリメントで、アメリカの大学生が数十名、このS・I・Tのキャンパスで一緒に過ごした。そして今夜8時に、彼らはブラトルボーロを立つことになっている。その中に、キャリッジ・ハウスで知り合った若い女子学生が彼らのプログラムの内容を私に教えてくれた。何でも彼女の父がこの夏商用で日本に行くそうで、日本人である私に彼女は非常に興味を示した。また彼女自身も大阪の近くにペン・パルを持っているという。今夜10時にコネティカット空港からドイツに向けて飛び立ち、エクスペリメントの学生として6週間（ショート・ツリップ、ホーム・ステイ、シティ・ステイにそれぞれ2週間ずつ）の生活体験をしてくるのだそうだ。二十才過ぎに見えたが、実際は18才だと言っていた。小柄で可憐な、明るい女子学生だった。名前も聞かずじまだったが……。

●グループ・セヴン入門

7月7日月曜も、雲1つない快晴の朝であった。日中でもそうだが、夜になるとキャンパスは一層冷え込む。日中はそれでも太陽が適温に調整してくれるが、夜ともなると、実に「寒い」のである。日本の11月半ば頃の寒さと言えようか。とにかく小さなシングル・ベッドの上に毛布1枚ではどうも寝付きが悪い。日本ではさぞ蒸し暑いことだろうと思うと、もう少し暑くならないものかと、得手勝手な望みを抱いたことであった。

さて、午前9時からドームBの一室で、ミシガン・テスト（Michigan Test）なる試験が一斉に行なわれた。2種類あって、最初はヒアリング・テスト（25分）、そしてペーパー・テスト（75分）で、かなり難しかった。（ペーパー・テストは文法、語彙、読解力にわたる。）

その結果、幸か不幸か、ボブとドンが担当する日本人メンバー10名ずつのクラスから外れ、S先生と私を含む3人は既成のクラスに編入されることになった。しかも、S先生と私は同クラス（グループ・セヴンというクラス）である。たまたま試験の結果が良かったために、他のメンバーとは別々になったわけだが、しかし結果的には、グループ・セヴンという既成のクラスに編入されたことは、私にとって大きなプラスとなった。なぜなら私の入ったクラスは、S先生を除いてすべて外国の留学生ばかりであり、しかも研修内容の程度もかなり高く、初めのうちはついて行くのが精一杯でずいぶん辛かったが、コミュニケーションの手段としては英語だけしか通用しない世界を得て、幸せであった。（聞くところによると、日本人メンバーのみのクラスでは、中学程度のプラクティスが繰り返され、キャンパス・ライフはともかく、そのことについては大方のメンバーが不満をこぼしていた。）

試験が済み、クラスが決定すると、午後のクラスから早速勉強に向かった。（時間割は、朝8時10分から夕方4時までのかなりハードなものである。）1時10分からディスカッション、2時10分からリーディング、3時10分から作文と続いた。ディスカッションのあるルームのセヴンはメイン・ハウスにあり、リーディングと作文の行なわれるパンプ・ハウスはキャリッジ・ハウスの先の左手のゆるやかなスロープを歩き着いたところにある小さな教室である。

既成の、しかも全く馴じみのない外国人留学生たちばかりで構成されたグループ・セブンのクラスに打ち解けられるかとの私の心配も、この最初のクラスの担当であったジム (Jim Lyons) という先生のおかげで、何とかやって行けるメドがついた。彼は、椅子に座って私たち2人の新参者を好奇の目で見ている学生たち1人1人にまず紹介した。エクアドルのヴィクトー、ペルーのルイス、コロンビアのギオマ (女子) とウィリアム、ボリビアのアントニオ、エクアドルのアルフレッド、パナマのグロウリア (女子)、そしてウルグアイのデイヴィッドの計8名が私たちのクラスメイトとなった。その出来事から即断できる通り、彼らは皆スペイン語を母国語とするラテン・アメリカからの留学生である。ある者はすでに4ヶ月、5ヶ月、半年もの間ここで勉強を続けているというのだから、一瞬、日本人メンバーばかりのクラスであればよかった、と後悔の念が頭を持ち上げたりしたのだが、しかし、入った以上は何とか自分の全力をこのクラスにぶつけて行くより他にないと自分に言い聞かせたのであった。それにしても、まことに国際的な雰囲気ではある。まさか南米語国の学生と一緒に勉強するなどとは夢にも思わなかったことなので、それだけに彼らとの接触は私にユニークな知識を与えてくれた。

6時限のリーディングと7時限の作文は共に前述のパンプ・ハウスの一室で行なわれ、担当はダイアナ (Dianne) という非常によく太った30歳前後の若い女の先生であった。リーディングにはスタインベックの『アメリカとアメリカ人』 (*America and Americans*) というテキストを読むことになり、早速20ページばかり読んでくることが宿題となった。作文はやはりお手のものなので、何の苦労もなかった。

初日の研修を終えて痛感したのは、ヒアリングの重要性である。常にスタンダードな英語ばかりが話されるのではなく、特にラテン系留学生の英語に慣れるのにはずいぶん骨が折れる。例えば、彼らは country を「コントリ」、culture を「コルチュア」、dangerous を「ダンジェラス」などと発音するので、初めて聞いた時には理解できなくて、私は自分自身の英語力を疑いかけた。だが、ダイアナに尋ねた時、その不安も解けた。

「……どうも私には彼らの発音がわかりにくいのですが……？」

「私もよ。」

ダイアナは、笑ってそう即答した。母国語であるスペイン語との関連上、ああいう発音が出て来るのであろう。そうすると、日本人の英語の発音もまんざら捨てたものではないな、日本の英語教育もまずまずだな、といささか自信を得たものである。ただ、日本人の英語はあまりに考えすぎて、正確を期すためか、どうもゆっくりしたものになりがちである。文法的に正確を期そうというのはいいことなのだが、反面臆病になってしまって、出て来るはずの英語がなかなか出て来ないという傾向がある。それではいつまで経っても「英語を話す」という1つの「技術」は手に入らないだろう。発音だけは南米人のそれと比しても全く見劣りすることはないが、しかし、彼らの何よりの美点は意欲的に英語を口に出そうと努めていることである。発音の拙さなど全く気にしていない。したがって、いろいろなミスはあっても、結構内容のある会話なり議論をしているのである。私は彼らからまずそういう点を学んだのであった。

●ジョンの講義から

こうして始まった厳しい研修は、以後2週間ばかり続いたのであった。それらのレッスンから

私はさまざまなことを学んだ。今ここでそれらを個々にわたって網羅する余裕もないし、またその必要もないだろう。ことに、語学の集中訓練であるドリルやラボ、それにリーディングや作文については多くを語ることもないだろう。（それらについては、すでに少し触れたし、これからも折に触れて引用するつもりである。）ただ U. S. Studies と U. S. Discussion を担当したジョン（John）という若い先生の講義は非常に興味深く、それらについてスペースの許す限り記しておくのも無駄ではないと思う。

講義はワット・ライブラリ（Watt Library）の一室で、また U. S. Discussion はパンプ・ハウスで行なわれた。ディスカッションの方はグループ・セヴンのメンバーのみのクラスで行なわれたが、講義は他のグループとのミックス・クラスであったから、若い教師の興味あるテーマに、図書館の一室はいつも聴講生があふれていた。興味あるテーマとは、アメリカ社会の内包する諸問題についてであり、さまざまな角度から問題提起がなされた。例えば大きなテーマだけを取り上げてみても、ユダヤ人の地位、都市問題、医療問題、離婚、教育問題、学生生活、非行の問題、家族構成と家庭生活、軍事問題、……と、これらのうちのどれ1つを取り上げても、1冊の大著になってしまうほどの大問題であるが、ジョンはこれらのアウト・ラインを小気味よく描いてみせ、かつ問題提起とした。なるほど深刻な問題ばかりである。各々について垣間見てみよう。

ユダヤ人問題は、他の有色人種差別問題（黒人、プエルトルコ人、東洋人等々）と絡んで、アメリカの人種問題の癆と言われる。現在300万人のユダヤ系米人のうち、200万人がニューヨークに住んでいる。「デートをしてユダヤ人だとわかると、もうそれ以上会わない。親自体もそういうふうに教える……」と言ったジョンの言葉は、今も私の脳裏に留まっている。

都市問題の講義で印象に残るのは、大都市における居住地域の明確な区割りである。この区割りは大体どの都市にも見られる現象だという。ジョンは、特にシカゴのそれを図で説明してくれたが、それによると、ミシガン湖に沿って北に行くほど富裕階級の居住地区であり、南下するに連れてスラムが顕著だという（このことについては後述する機会がある）。またこの区割りは、“Across the Tracks”という言葉でもよく知られている。すなわち、鉄道の線路を挟んで、一方が白人系、他方が黒人を主としたスラムという区割りである。

次に、アメリカでは医療費が大変である。ジョンによれば、少し注射を受けたり、薬をもらったりするだけで40ドル（1万4,400円）くらいはかかるという。さらに入院などすると（病気の種類や入院期間等によっても違うが）、数千ドルは覚悟しなければならない。江藤淳氏の『アメリカと私』の中でも、このことはよく証明されている。保険の加入は絶対必要なのだが、貧困のゆえにそれができない人も多くいるという。アメリカは、そういう意味においても高くつく社会なのである。（これについては、ホーム・ステイに入るや否や、夫人が、病気にならないように気をつけてほしいと私に要望したのを考えても納得がいくのである。）

次に離婚についてだが、年々アメリカでは離婚件数が増加しているという。離婚率は25%というから、1つの社会問題である。とにかく初婚平均年齢が最近の統計によると、男子22歳、女子20歳前後だから、離婚率が高いというのも当然と言えば当然の成り行きなのかも知れない。まだ考えが定まらない段階で結婚してしまう場合が多いので、つまり精神的成長期における結婚であるため、年齢の移行に従って不幸な結果に陥るといえるケースが多いのであろう。17歳そこそこで結婚して、性格が合わないなどの理由で別れてしまう例も少なくないらしく、この場合も子供

がいなければ、いろいろな意味で比較的離婚しやすい。そして彼ら自身も、離婚そのものにそれほど罪悪感を持たず、一種の人生体験とでも考えているらしい。

今、双方がきわめて若くして結婚し、子供ができていない時の離婚の場合について述べたが、これが、すでに子供ができていたり、子供がなくても、双方が30、40歳の夫婦となると、事態は難しくなる。端的に言えば、こういった離婚にはずいぶん金がかかるということである。すなわち、男性は離婚した女性に慰謝料、生活費、扶養料、そして子供の生活までも引き受けねばならないのである。（それは彼女が再婚するまで続く。）ただ、子供をどちらも引き取りたいという場合には、大体女性の方が引き取る例が多いという。無論、離婚については、階層、人種、居住地等々によって、ジョンのこれらの説明がすべて該当するとは思われない。むしろそうでない場合も多いかも知れない。しかしアメリカにおける離婚は、日本のそれと比して、経済的という点でかなり難しいものであることは確かである。この点、日本の場合、バカでかい慰謝料を取ったり取られたりして週刊紙のお世話になっている一部芸能人の華やかな離婚は別として、やはり一般的には、慰謝料らしきものも取らずに泣き寝入りしてしまう（逆に、与えずに平気な顔でいる）というケースが今でも底流をなしているのではあるまいか。

それから、アメリカを論じた書物には必ずと言っていいほど黒人問題が取り上げられているが、私も講義ノートからめぼしいものをピック・アップして1つの問題提起とし、みずからも考えていきたいと思う。「幸福とはいったい何であるのか」ということ。黒人問題を考える時、私にはいつもこの言葉がつきまとう。たまたま白人が黒人をアメリカ史の初期に支配した。そのことによって、先入観・偏見・差別観が白人の側に確立した。あれ以来150年も経た今日にしてこうなのである。「こうなのである」とは、無論現在の黒人の実態である。この小文は研究書の類ではないので、詳細は諸文献に譲るとして、私はやはり書物には出てこなかった別の実態を、ジョンの講義から引いておきたいと思う。

ニューヨークには、百万人以上もの失業者がいるという。彼らは月額400ドル（14万4千円）を支給されている。ミシシッピー地方の田舎では、月に50ドル（1万8千円）ほどの収入できわめて細々と暮らしている貧困者もかなりあると聞くから、400ドルももらえれば結構なことではないかと思えるが、ニューヨークの現実はそれほど甘くはない。ニューヨークは年々住みにくくなっている。特に物価高は深刻である。

ジョンは、スラムの話に及んで、「彼らの社会では、7人の子供が7人の男によってできた……」と言い、彼らの社会や文化を異質のものだと決めつけているような語調があった。そして、政府自体も彼ら黒人をはじめとしたスラムに住む人間をずいぶん嫌っているらしく、補助金支給の際など、彼らを動物のごとく扱うという。“The way of life is quite different.”とのジョンの言葉は、差別問題の象徴的な断絶を物語っているように思えた。関連するので、ジョンの講義ではないが、リーディングの時間にテキスト『アメリカとアメリカ人』の中のある1章についてディスカッションしたことがあったが、それをここに少々付加しておきたい。ダイアナは、テキストと併行して「今日、黒人、特に教育ある黒人は白人と対等のステイタスを得ているが、一般の黒人についてはなお白人との間にギャップがある」と指摘した。そしてさらに「小さなカレッジなどで、まだ黒人学生の入学を許可していないところもある」という。私が“The authorities of those colleges aren't cultivated or progressive.”と言うと、ダイアナもそれを肯定した。とも

かく、アメリカ全人口の10%、2千万人以上の黒人に対する差別問題は、非常に複雑かつ深刻なのである。

ジョンが語った黒人問題の指摘にはかなり問題が残るように思う。というのは、明らかに彼自身もやはり差別者の立場で、ともかく白人と黒人の社会は全く別ものだという定義めいたものを下しているのだから。黒人は白人とは別のカルチュアを持ち、別のウェイ・オブ・ライフを営んでいるのだという考え方なのである。白人と黒人の溝、それはリンカンが法的に奴隷解放した次元以来、さして埋められてはいないのである。

黒人問題については、あとにもまた考えてみる機会があると思うので、ジョンの講義を中心とした問題点のピック・アップに留め、次のテーマに移りたいと思う。

教育・学生問題について、ジョンはいろんな角度から説明・分析を加えたが、私はその中で特に「学生と麻薬」の問題について記しておきたい。日本でも1970年あたりからテレビなどでも盛んに報道されているので、ヘロインやマリファナはあまりにもポピュラーな固有名詞になった。マスコミによるそれからの報道の影響もあってか、日本でもしだいにマリファナが流行し始めている。それでもまだ駆け出しの域を出ないが、本家のアメリカでは亡国論さえ出ている。ジョンによれば、学生のうち常用者は20%、一度は試みたことのある者は実に70%という恐るべき数字を示している。1969年でこの数字だから、最近ではさらにその増率は疑う余地もない。大学生はもちろん、近頃では高校生はおろか、中学生や小学生にまでマリファナを吸う姿も珍しくなくなったという。(さらにアヘン常習者が数十万人いると言われている。)まさに麻薬はアメリカの一大問題である。それにもかかわらず、これだけの人間がマリファナに耽るとなると、法律もあまり効きめがないのが実情なのである。

ヴェトナム戦争についても少し触れておこう。これは、イングリッシュ・ディスカッションの時間(ジム担当)でなされた討議の一部である。

ジムは、アメリカのヴェトナム政策についての意見を日本人の立場から述べてほしいと求めた。「アメリカ政府は直ちにヴェトナムから兵を本国に帰すべきです。アメリカはこの戦争ですでに敗北しています。」と、私は述べた。ジムもそういう立場にあった。彼は人工衛星や宇宙開発等にもかなり批判的な意見を持っていた。彼は「ヴェトナムに費やされる戦費1ヶ月分でハーレムが再建できる」あるいは「アメリカ社会の内部自体に、もっと中心に据えて取り組まねばならない問題があるのではないか」とも語った。とにかく全国家予算の10%が国防費に使われており、しかもそれはさらに増大しつつあるのである。

その他、「政府が青年をヴェトナムへ強制徴兵する。だが青年は行きたくない。そのため政府は、コンバット・ペイ(Combat Pay)で彼らを釣るのである。大体19歳から27歳くらいまでの青年が一時的ドラフトの対象にされる。ただし、大学生の間は免除される。黒人のヴェトナムへ行くパーセントが高いのは、彼らの大学進学率が低いからである。(別の原因としては、やはり貧困のために政府から確実に支給される手当を当てにして、徴兵に應ずるケースが黒人の場合きわめて多い、と本多勝一氏のルポは指摘している。)」というような指摘がジムによってなされた。いつ果てぬともわからぬ泥沼に陥ったヴェトナム戦争だが、勝敗はすでに決している……。

最後に、私がキャンパスに学んでいた間に、上院議員のE・ケネディが自動車事故を起こしたことが、ジョンのU. S. Discussionの時間でも取り上げられた。何でも助手席に乗せていた故口

バート・ケネディの女秘書が死んだという。ところが彼は、事故勃発後7、8時間黙秘にしていたらしい。このことで、罪に問われたが、これに対し彼は、「私はショックを受けていて、そこまで気がつかなかった」と弁解した。(後に、この死んだ秘書と彼が良からぬ関係にあったことが判明した。)しかし、アメリカという国は万事金次第という感を一層強くしたのは、ジョンの次のような言葉だった。「彼は大金持ちだし、マサチューセッツでは大した力を持っているから、多分失脚することはないだろう。」さらに彼は「E・ケネディは必ず大統領になるだろう」とも付加した。(それからしばらくして、ケネディは何事もなかったかのように再び議会で弁舌をふるっている。)

研修から学んだ内容について記すのはこのくらいでよそう。まだまだ書きたいことは山ほどあるが、網羅してみる必要もないだろう。ただ、これまで私はジョンやジムのクラスから学んだこと、それもアメリカ社会の持つさまざまな問題点のみを大ざっぱにピック・アップすることに努めてきたために、不十分さは歴然としている。各々極めて難しい問題ばかりであり、私も今後さらに理解を深めて行きたいと思う。ここでは「ジョンの講義から」と題して、問題提起に留めたい。

●ブラトルボーロの街

ブラトルボーロ滞在中に、私は5度ばかりダウンタウンへ行った。最初は徒歩で行った。キャンパスからあの山道を下って州道に出、それからまだ2、3キロもあり、合計3マイル(5キロ弱)も歩き、くたくたに疲れ、それ以後はもうスクールバスの厄介になったのだった。

人口1万2千のグラトルボーロは、小じんまりとした清楚な街並みが印象的である。火曜日と金曜日にはスクールバスが街まで走るので、この州道沿いにできた美しいダウンタウンは各国の学生たちの姿が目につき、国際色豊かな様相を呈する。彼らはスクールバスが迎えにやって来るまでの1時間余りの間、買物をしたり、洗濯屋に駆け込んだり、本屋を覗いたりするのである。私も、食料品店に入ってよく罐ビールや果物を買ったり、本屋で書物を買^{あさ}漁ったりしたものであった。ウルワース(Woolworth's)というスーパーに入った際に値札を少しメモしておいたので、参考に供したいと思う。

- マニキュア 59¢ (217円)
- バイタリス 2ドル (720円)
- ブラジャー 1.29ドル~1.79ドル (400~600円)
- ネクタイ 1ドル (360円)
- スポーツシャツ 3.33ドル (約1200円)
- サンダル 2ドル (720円)
- バッシュシューズ 2.29ドル (824円)
- バンド 1.30~1.69ドル (400~600円)
- ノート 50¢前後 (180円)
- BIC ボールペン 19¢ (68円)
- アイロン 7.399~12.33ドル (3000~4500円)
- 罐ビール(6本) 1.65ドル (約600円)
- [※ \$1.00=360円]

上記の通り高いのもあれば、そうでないのも見られる。他の店にもいろいろと物色を試みたが、当地にはみやげ物らしいみやげ物が見つけれなかった。街自体が小さいし、特別な観光地があるわけでもない……。みやげ物と言えば、絵はがきくらいのもので、その他に当地の木を使った美しい灰皿を手に入れた程度であった。

この片田舎の美しい街の片隅にもヒッピーの姿は見られた。メイン・ストリート沿いの教会の前に数人の若者が裸足でたむろしていた。教会の天に向かう垂直の尖塔と彼らは対照的であった。「アメリカ人は毎日曜日に教会へ行きます。」という英作文的文章が、今日ではかなり真実でなくなっている、ということは何かで聞いたことがあるが、私は彼らヒッピーの姿を見かけた時、反射的にこの紋切り型文章を思い起こしたことであった。

直接ダウンタウンのことではないが、ある日、7時限のクラスが終わってから夕食までの2時間ばかり、S先生と再び山道を下って、州道のあたりまで散歩してきたことがあった。坂道を下り終わった平地にトレーラー・ハウスがいくつも並んでいた。日本ではまだそれほど普及していないので、私も非常に興味深く眺めた。常に流動するアメリカ人には欠かせぬ家財の1つと言えよう。彼らは自家用車で長距離旅行をする際、車の後ろにこのトレーラーを接続して、行きたいところへ行き、住みたいと思うところに一時的に住むのである。中は簡単なベッドや台所の設備も整っており、家族などで休暇旅行を楽しむ場合に活用されている。こうして、州道やハイウェイから少し入った閑静な山あいの平地に車を止めて、いただければいいのである。私もこの滞米中、各地でこのトレーラーを見かけたことであった。

その草地で子供たちが遊んでいた。私は声をかけた。

“Hi!”

“Hi!”

彼らは皆寄って来た。写真を撮ってやろうと言うと、一列に並んで「チーズ！」と声を揃えて微笑んだ。子供というのはどこへ行っても変わらないものであることを嬉しく思った。全く見ず知らずの者でも、英語という1つの言葉によってこうして意思が通じ、そしてすぐ仲良くなれるのも、やはり子供の特権なのだろうか。

そのうちの最年長の子供がグローヴを持っていた。

「グローヴをもう1つ持ってるかい？」

「うん」

「じゃ、キャッチボールをやろうか？」

私がそう誘うと、彼は大喜びしてトレーラー・ハウスに消え、またすぐもどって来た。その駆ける後ろ姿にも、やはり万国共通のあどけなさが滲み出ているようで、私も純粋な気持ちでこの少年の相手になれた。

彼の一家はアイダホ州から来ているというから、ずいぶんと遠出である。しかし、これとてこの国では別に驚くに足りないことなのだ。彼らアメリカ人はこの広大な大陸を車で駆け回っているのである。（後に私自身も、車に乗せてもらってかなりの長旅を一気にやってのけたことがある。）

私がキャッチボールをしている間に、S先生はすでにハイウェイの陸橋を渡って、州道に至るまでにある共同墓地を歩いておられた。子供たちのうち、9歳の男の子と女の子が私のあとについて共同墓地までやって来た。

墓地とは言っても、それは日本の墓地とは対照的に明るく美しいものだった。公園のような感さもある。小さな国旗がいくつもはためき、墓地は緑の草がきれいに刈り込まれ、花が色取りどりに供えられてあった。(後に、ワシントンのアーリントン墓地を訪れたが、そこもやはり日本の墓場のイメージとはかなり掛け離れたものであった。)

州道沿いにモーテルが2、3軒並んでいた。日本で最近異常な勢いで増えつつあるモーテルとは比較にならない健康さがきわ立っていた。日本人は何でもよく真似をする国民だが、オリジナルなものを超えたものに消化するのであればよいのだが、それ以下の、オリジナルなものが目指すものとは全く違う方向に脱線している例もずいぶん多い。モーテルもその1つである。アメリカのモーテルは、概して健康的な点が目に留まった。プールがついていて、家族が水浴びを心行くまで楽しんでいる光景は、見ていて実に爽快そのものだった。

モーテルの裏側に幸運にもドライブ・イン・シアターを見つけ、カメラを向けたあと、州道沿いにあったアンティークス (Antiques=日本の、いわゆる骨董屋) を覗いた。なるほど古物ばかりがかなり広い店内に所狭しと並んでいる。このような骨董屋はここだけではなく、広く各地に散在しているようである。隣のニューハンプシャーやシカゴでも、やはりいくつも見た。これだけの消費大国でありながら骨董屋なんて時代遅れ(?)のものが存在するなんて、と不思議に思われるかも知れない。私もそうだった。だが、アメリカの歴史の若さということを考え合わせると、その存在もまんざら不思議ではなくなる。つまり、何十年前のシロモノだとか、誰々の使用していたものだとか……アメリカ人は、若いアメリカであるがゆえに少しでも古い物を手に入れ、珍重しようとするのである。私の目には、彼らがそういったものに何か取り憑かれてでもいるかのように感じられてならないのである。(アメリカ人が、来日して京都や奈良の神社仏閣を目にし、それらが3百年、5百年、あるいは千年も前に建立されたものであることを聞かされると、目を白黒させて驚き、一種憧れの気持ちさえ抱くことからでも、そのことは合点がいくだろう。)

●ジムのこと

毎日1、2時限のイングリッシュ・ドリルと火曜日と木曜日のイングリッシュ・ディスカッションを担当したのはジム・ライオンズ (Jim Lyons) と3時限のラボの時間も彼の担当であり、彼には勉強の面で数々の世話になった。特にドリルの時間の厳しいバタン・ブラクティスは、さまざまな教訓を私の頭に刻み込んだ。

そのジムが、私たちがグループ・セヴンに加わって1週間ほどして、珍しく休んだ。(勉強の方は、代わりに英語部長のトッド先生 (Mr. Todd) がやられた。) 数日前に、奥さんが癌で寝ていると彼が漏らしていたことをとっさに思い起こした。だが、死は意外と早く彼女を襲ったようであった。再び彼がクラスに現われた時の様子を、私はいまだに忘れることができないでいる。死期がそんなに早かったとは……。その死を力なくクラスに語る時の彼の姿は、あまりに痛々しかった。その痩せた顔がいっそう類落ちしたように見えたのは、私の錯覚だったのであろうか。私たちは、ただ啞然とするばかりだった。アメリカ人としてさほど背も高くないし、太ってもいない、いわゆる「押し出し」のきかないタイプであるが、いやそれだからこそ、その姿には一瞬慰めの言葉も浮かんでこなかった。目が落ち込み充血しているのを見ると、いても立ってもいられなかった。まだ50過ぎなのに、しかも、子供が成長すれば同居することのほとんど不可能なこのアメリカ社

会で、彼は今後何と寂しい生活に耐えていかねばならないのだろう。彼は聾啞学校の教師（このS・I・Tには講師で来ている）、そんな立派な職業を持つ人が、どうしてそんな悲惨な宿命を背負わねばならないのであろうか。思いだすたびに、今も胸を締めつけられるのである。彼は奥さんを愛していた。そのことは、彼の言葉の端々に滲み出ていた。それだけに……。ラボの時間に教師用コンソールの前に立つジムの表情や後ろ姿には、ただ悲しいものだけが取り巻いていた。

一方、ジムが再び現れたその日、月に初めて人間を送るロケットがケープケネディから打ち上げられた。このアポロ11号の打ち上げは、全米はおろか、世界中にテレビ中継された。私たちがテレビに見入った。ジムの悲運と対比する時、それはあまりにも期待にあふれたものであった。ホールに集まってテレビを囲む大勢の学生は、固唾をのんでじっと見守っている。あと4分…3分…2分…1分…そして秒読みに入る。50秒…40秒…30…20…10秒…5, 4, 3, 2, 1, 発射！ 学生たちは黙して手に汗を握っていた。

アポロ11号の打ち上げは成功して、人類史上に輝かしき足跡を残すべく、宇宙へと爆音を残して消えて行った。

●嬉しい便り

母国を遠く離れてアメリカに学ぶ留学生を最も慰め、幸福にするものは、何と言っても、親や友人から届く郵便物であろう。皆、口にするしなは別として、やはり一度はホームシックに陥るようで、私も例外ではなかった。このキャンパスでも、メイン・ハウスの一室に棚を設け、そこにアルファベットで表示したボックスに区切ってある。毎日届けられる留学生への郵便物はすべてここに入れられる。そして学生たちは毎朝、毎夕心を浮き立たせながらこの部屋に入るのである。その様子は、大袈裟に言えば、ちょうど日本の大学入試の合格発表の光景に似ている。ボックスに自分宛ての便りを見つけた時の各人の顔は一斉に崩れ（ことに中南米の学生たちは、声をあげてその喜びを表現する）、ついに期待を裏切られた者の顔は、一瞬にして消沈してしまうからである。この光景は第三者から見れば、プツと吹き出しそうに思えるけれども、当人にとってはやはりずいぶんと真剣なのだ。

そういう期待を持って、私も毎日ボックスを覗いていたが、なかなか来そうになかった。そのうち、S先生にも奥さんから便りが届いた。普段口数も少なく、顔の表情もあまり変えない彼も、さすが嬉しそうに口もとを弛めた。やはり嬉しかったのだろう。その便りによると、日本では私たちが羽田を立って以来晴れたのは3日ほどで（この便りが着いたのはすでに7月17日）、あとはずっと雨降りばかりだそうで、梅雨明けが例年より遅いということだった。あの蒸し暑い鬱陶しさが私の脳裏に蘇ってきた。それに引き換え、プラトルボーロは適当に夕立があって、ほぼ涼しい晴れの日が多い。

気候の話が出たついでに、プラトルボーロ一帯の気候についてもまとめておこう。

このあたりでは夏の天候がずいぶん変わりやすい。何人かの土地の人が話してくれたように、文字通り“changeable”なのである。私たちがこのキャンパスに来た当初、数日間ずいぶん涼しい、というよりむしろ寒いくらいで、5日目にはついに管理人のジョージおじさんがヒーターを入れてくれたほどだった。プラトルボーロの街よりは大幅高地にある（5百フィートくらい）ので涼しいことはよくわかるが、それにしても夜など毛布1枚ではなかなか寝つけないのである。初

めてこのキャンパスまで山道をスクールバスに揺られて登って来た時、これは凌ぎやすくいいと大喜びした。事実、しばらくはずっとそうだった。小鳥は至るところでその美しい声を木霊させているし、こおろぎの声さえ身に染み、私はもうこのあたりの秋を疑わなかった。夜など、日本で言えば11月半ばくらいの寒さだったのだから。

しかし、日も過ぎ10日ばかり経つと、急に日差しが強くなり、それも初めのうちは日陰に入ればまだ涼しかったのに、やがて湿気も高くなり、しばらく忘却していた日本の息苦しさを思いだすほどの暑さに見舞われた。そしてこの状態が3、4日くらい容赦なく続いた。また、急に空が真っ暗になったかと思うと、すごい雷とともに激しい雨がしばらく続いた。“It rains cats and dogs.” (どしゃ降り) という表現があるが、日本では信じることができなくても、ここでは容易に理解できる表現だと思う。そして1時間余りもすると、この雨は急に止む。それからまた温度は下がって、涼しさが再び私たちのもとにもどって来る。……

ところで、当地の冬はどうだろう。夕食のあと、草地の林檎の木の下でくつろぎながらボブに聞いてみたことがあった。大体11月の終わり頃に初雪が降り、12月に入ると本格的な雪のシーズンとなる。そして3月頃まで白い雪がこの地方を襲うのである。ひどい時には5メートルもの積雪を見るという。屋根の高さである。温度もぐっと下がって、寒い時で平均マイナス10度くらいになる。その代わりにキャンパスの傾斜面で、皆スキーや橇を楽しむことができる。

「でも、やはり春と秋、特に秋が一番素晴らしいな。野山の紅葉はそれは美しい。あたりが真っ赤に染まる美しさは、口では言い表わせないなあー。」

ボブは丸い目をいっそう丸めて、語ってくれたのだった。

●ボストンへの旅

7月18日の金曜日から20日にかけての週末に、私たちS・I・Tの留学生は、予期せぬ息抜きを楽しむことができた。学校当局が安い費用でこの旅を計画してくれたのである。

金曜日の勉強は午前中で終わり、1時過ぎにピープルズ・バス・ライン (People's Bus Line) のバスが来た。コネティカット州を渡り、制限時速60マイル (90キロ) のハイウェイを疾走するバスからは、ニューハンプシャーの森や白樺林が単調にいつまでも続くのみである。キーン (Keene) という町を経て、やがて有名なコンコード (Concord) を通過する。私はすぐさまエマソンやソロー、ロングフェローなどのニュー・イングランドを代表する文人・学者を思い浮かべた。

1つ特筆しておきたいのは、バスの運転手の運転技術の拙^{つたな}さである。特にギア・チェンジの入れ方がきわめて頼りなく、私たちを不快にさせた。1度ならず、ほとんどチェンジの度にそうなのである。(こういう体験は、その後も度々あった。) アメリカ人の不器用さを象徴しているようにさえ思われた。手先の器用さにかけては、日本人は確かに抜群のようだ。

マサチューセッツ・ターンパイク (Massachusetts Turnpike) に入ると、片側3車線となり、交通量も急増するが、道が広いのでスピードは相変わらず速い。まもなくボストン市街に入る。それまでは坦々としたニュー・イングランドの平原の連続であったのが、急に白いビルや民家が目立ち始め、大都会の雰囲気が私たちをボストンに近づけた。

鉄道の路線が何本となく並んで走る。ずいぶん古い都のようだが、近代的なビル、それも何十階というビルが時々見え、姉妹都市である京都とやはりどこか共通点が覗いている。この鉄道で

はないが、ボストンに着くまでに線路を幾度も見かけたり横切ったりした。が、ちょうど日本の私鉄の寂れゆくローカル線のように、草が生えっ放しというものも多かった。中には、廃線間近かと思わせるほど草が生い茂っている線路もあった。アメリカでは鉄道産業はすでに斜陽なのである。（後に、シカゴの屠殺場付近を見るが、そこでも実情はこれとほぼ同じである。）代わりに、自動車が人々の足となっている。そして車がなければ、足がないに等しいということである。

私たちのバスは、プラトルボーロを立て3時間足らずで、ボストン市内のコプレイ・スクエア・ホテル（Copley Square Hotel）——このホテルの付近一帯、特にホテルの前の大きな広場をコプレイ・スクエアと呼んでいる——という7階建てのこざっぱりしたホテルに到着した。

ボストンは、なかなか美しい街である。古さと新しさがうまく調和している。赤茶けたレンガ造りの家並みに混じって、近代ビルがあちこちに聳えている。京都もいいが、その全体的な調和という点ではボストンの方がやや優っているように思う。京都の古さと新しさは、何かしっくりと噛み合わない感じがしてならない。日本人は概して、古いものを古いものとして残そうとしない嫌いがあるようだ。史跡などでもいとも簡単に取りこわして、そのあとに遊興施設などを建設したりしてしまう。あまりに古いものが多すぎるからだろうか。しかし、そのうち、日本古来の優れた伝統も破壊・消滅されてしまうのではないかとの懸念さえ抱く今日の日本である。国宝とか重要文化財とか天然記念物だとかは次々に指定されるのだが、ただ指定だけに終わってしまって、管理・保存という点で実に心もとない側面がある。例えば、近年訪ねた熊本の、あの阿蘇に向かう途中にある有名な杉並木もその1つだと思う。全く天然記念物の名が泣きはしないか。あれだけの交通量があれだけの排気ガスを出せば、恐らく近いうちにきっとあの杉並木は枯死してしまうであろう。

夕食後、ボストン市にひときわ高く聳え立つ、近代ボストンの象徴ブルーデンシャル・センター（The Prudential Center）の方へと足を向けた。ホテルから徒歩で5、6分のところだ。何と52階の高層ビルである。ある生命保険会社のビルで、中はその事務所をはじめ、ショッピング・センターや他の会社のオフィスが軒を連ねているようである。エレベーターで一気に屋上まで登ってみることにした。その間わずか34秒だった。同時に、階段を一段一段52階まで登ってみることの肉体的疲労を思った。

Skywalk という展望台からの見晴らしは、まさに文字通りのものだ。展望台への入り口で50セント（180円）払った時、“I'm a skywalker.”という丸いピンをもらった。なるほどと思ったのは、少し胸をわくつかせつつ展望台に出た時だった。夜のボストン市街がさっと私の目に飛び込んで来た。52階はあまりに高い。まさにスカイウォーカーという表現は適切である。ニュー・イングランド最大のこの都市が一望できるのである。昼間見ても壮大なパノラマとなるだろうが、夜景——大小のダイヤモンドをちりばめたときボストンの夜の表——をこうして見られたことは全く幸せであった。

大リーグのボストン・レッドソックスのホーム・パークも、手に取るように見える。ゲームが行なわれているようで、百万燭光に映えるグラウンドの芝生の緑が夢のように鮮やかに目に入って来る。その緑があまりに鮮やかすぎるので、小さく見える選手たちの白いユニフォームが溶け込んで行くようで、何度も瞬きしたり、あるいは視線をそらして一時暗さを求めねばならないほどであった。ともかく、数ある美しいダイヤモンドの間であって、このホーム・パークのダイヤ

モンドはことのほか大きなカラットを持つものであった。もちろん、他の無数の小さなダイヤが光を放っていてこそ、この巨大なダイヤもその存在価値を持つのだということも忘れてはならないと思う。暗闇の市街地にただこのホーム・パークの輝きだけを見ても、それは至極単純な光にしかならないだろうから。週末の金曜日とあって、ホーム・パークは大入りのようであった。

展望台を一周してみたが、このブルーデンシャル・センターそのものが市街のほぼ中心に位置しているので、夜景の美しさは四方のどこからでも賞讃できる。展望台は若いカップルでいっぱい。エレベーターを降りて展望台に出る入口を通過したところに土産物売りの店があり、そこだけが明かりをつけているだけで、あとの三方はできるだけ夜景の美しさに陶酔できるようにとの配慮からか(?)、明かりをつけていない。ずいぶんと暗い。必然カップルたちはそちらの方にとむろする。愛をささやくシーンが無理に見せつけられるように私には感じられ、一面微笑ましく思ったが、また反面あまりいい気もしなかった。微笑ましいというのは、彼らが人前でもそうして抱擁し合ったりキスしたりできるその国民性(?)の違いを羨ましく思ったということであり、いい気もしなかったというのは、個人的に(?) そうなのであった。

帰り道、マーケットに立ち寄ったが、もう夜の10時だというのに、客が列を作ってカウンターの前に並んでいた。そして彼らは実に精力的に見えた。金曜日なのだ。買いだめをしているのだ。ボストンの忙しい週末風景であった。

翌土曜日は、朝から地下鉄に乗ってケンブリッジを訪ねた。地下鉄は25セントを改札のスロットに入れると、1人分だけ回転バーが動いてプラットホームに出られるようになっている。改札係など1人も見えない。ただうす暗い地下鉄ホームの改札の手前に両替をするブースがあるのみだ。のちのニューヨーク訪問の際にも述べねばならないが、鉄道業務に関しては日本は群を抜いていると思う。社員を整理・合理化する意図もわからぬこともないが、サービス業たるものは飽くまでも客本位でなければならない。アメリカの場合、鉄道がすでに斜陽産業であることを考えれば理解できないこともないが、それでもなお客の立場に立ったサービス向上を望みたい。

ここの地下鉄は、一般的な電車というより、ちょうどレールの上を走るバスといった方が適切だろう。バスの形に似ているのだ。スピードもかなり速い。途中パーク・ストリート (Park Street) で乗り換え、ハーヴァード・スクエア (Harvard Square) で降りた。ハーヴァード大学のあるケンブリッジである。

地下鉄を降りて階段を登り、地上に出た途端に学生たちの若々しい声が賑やかに耳に響いて来た。新聞を売っている長髪の学生の姿がひととき目につく。一瞥すると、裸体写真や若者が性交している写真が大きく載っている。いわゆるアングラ (Underground paper) である。何十部かを両手に持って、大声で早口に喋りまくっている。ほとんどの通行人は彼らに目もくれない。しかし、性の解放はこの土地にも大きく影響を与えているようだ。こういう若者の姿は、ボストンばかりでなくニューヨークやワシントン、あるいはサンフランシスコでも見られ、全米的傾向なのである。

いよいよハーヴァードの門をくぐる。広い緑の構内に木々が生きている。古いレンガ造りの学生寮も見える。右も左もわからぬままに、まもなく黒っぽい銅像の前に立った。これこそ、ハーヴァード大学の創立者ジョン・ハーヴァード (John Harvard) の像である。それは学生ホールの

すぐそばにあり、緑のキャンパスをじっと見つめている。この大学の創立が1638年というから、もう330年余りも昔のことである。1607年にこの大陸に初めてアングロ・サクソン系移住者が上陸し、さらにあの有名なメイ・フラワー号でやって来た102名の壮挙は1620年のことであった。その頃から実質的なアメリカ史が始まったのだから、まさにハーヴァード大学はアメリカ史と歩を一にしてきたとも言えるわけである。名実ともにアメリカ最古の大学であり、世界の学問の殿堂と言われるゆえんである。

続いて大図書館を訪ねた。ジョン・ハーヴァードの銅像の立つ学生ホールの建物のちょうど反対側が広い緑地になっていて、木々があちこちに何十本となく植えられ、学生たちにとってかっこうの木陰を提供している。この緑地の一方に巨大な図書館がその威容を誇っているわけである。それはハリー・エルキンス・ワイドナー（Harry Elkins Widener）というハーヴァードの卒業生を記念して、その母親エリーノア・エルキンス・ワイドナー（Eleanor Elkins Widener）が1915年に寄贈した総大理石の大図書館で、その外観、蔵書数など、実に類を見ないほどの大学図書館である。アメリカの持てる者の力を私たちは、この図書館に見ることができる。夏休みではあっても、図書館は日曜日を除いて毎日午前8時45分から夜の10時まで開けているとのことである。

この図書館を一方に、その真向かいに白い礼拝堂が天に向かって延びていた。思うに、ケンブリッジ自体がすでにハーヴァードなのである。ケンブリッジがあつてハーヴァードがあるのではなく、ハーヴァード大学があつてケンブリッジの街も存在し得るのだと言っていいたい。

ハーヴァード大学の雰囲気酔ったあと、本を買い漁ったり、いくつか店を覗いてみたりして足にくたびれを感じると、ようやく帰路に着いた。同じ地下鉄でパーク・ストリートまで行き、その公園ボストン・カモン（Boston Common）でしばらく憩った。休日とあって、かなりの人出だ。何十羽という鳩が人のいるところに集まって来て、豆や餌をつつついている。実にのんびりとした光景である。ベンチから誰かが立とうものなら、鳩の群れはバサバサッと舞い上がる。白いワイシャツに糞をかけられて、文句を言っている者もいた。

翌日曜日は、いよいよボストン滞在の最終日となった。朝食後、S先生と古いレンガ造りの住宅街を数ブロック歩いて、チャールズ川（The Charles River）に出た。かなり大きな川だ。涼風が川を渡って来る。川面はるかに白い帆のヨットがいくつも浮かんでいるのが見える。岸辺の草地には、日曜日とあって多くの人たちが腰を下ろしたり、寝そべったりしている。その中の1人の老婦人に話しかけて、そのまま10分ばかり話し込んでしまった。彼女は、大分以前に日本に行ったことがあると言って、横浜や長崎、神戸などの港町を盛んに連発した。それから遠くに見える金色のドームの建物を指さしながら、あれが州会議事堂（State House）だとか、また川向かいの一連の建物がM・I・T（Massachusetts Institute of Technology）であることも教えてくれた。チャールズ川ほとりのひと時であった。

午後は時間を持て余しそうだと思っていると、皆がミュージアム・オブ・ファイン・アーツを訪ねるといので、歩き疲れてあまり気乗りしなかったが、やはり二度と来れないかも知れないボストンを1つでも余計に見ておくために、私も出かけて行った。

ボストンの古さも徐々に変貌を遂げつつある。あの赤茶けたレンガ造りの建物は次々と取りこわされ、その跡には鉄骨が組まれ、新しい建物へと塗り変えられて行く。その先端を行くのが52階のあのブルーデンシャル・センターだ。ボストンも、時代の流れにぴったりと沿っているよう

である。さっきの老婦人が教えてくれたクリスチャン・サイエンス教会のドームを横に見ながら、私たちは直射日光を受けて歩いた。そして15分か20分も歩いて、ようやく美術館に辿り着いた。この美術館の裏側一帯はフェンウェイ・パーク（Fenway Park）と呼ばれ、昨夜ブルーデンシャル・センターの展望台から眺めたあのボストン・レッドソックスのホーム・パークもこの一角にあるのだ。

アイスクャンデー屋がチリンチリンと鈴を鳴らしながら通りかかったので、オレンジとチョコのバーを2本買った。日本の昔よくやって来た、あのアイスクャンデー屋——自転車の荷台にキャンデーの入った箱を乗せ、その箱には「キャンデー」と書いた小さな幟を立てて、「アイスクャンデー、ええ、キャンデー、アイスクャンデー……」と汗を拭き拭きやって来た——とは少し違うが、しかし雰囲気はよく伝えていた。キャンデー屋というのも同じようなものなんだな、と思ったりした。（このキャンデー屋は、3輪の自転車を引いていて、後輪2つにキャンデー・ボックスが取り付けられている。だから、日本の2輪の自転車の荷台に積む小さな箱とは、大きさの点で大分違う。それに、日本のボックスには大体1種類か2種類、多くても3、4種類のキャンデーしか入っていなかったが、ここではずいぶん種類が豊富である。アメリカのような先進国においてさえ、こうして至るところで（ニューヨークやシカゴでも）アイスクャンデー屋の姿を見かけるのに（何もアイスクャンデー屋が後進国的と言うのではないが）、現在の日本では、もはやあの涼しいアイスクャンデー屋の声は聞かれなくなった。寂しいことではある。）

このあたりから見るブルーデンシャル・センターもなかなか素晴らしい。アメリカの一般の公園は、規模や管理という点で、日本のそれとは比較にならない。草の上に腰を下ろして談笑する者もいれば、アベックで肩を寄せ合いながら歩いて行く若者もたくさんいる。でもその光景は、日本で見かけるほどにイヤらしく感じない。恋人同士が、あるいは夫婦——たとえ若かろうと老いていようと——が手をつないで歩くことがごくごく自然な姿として目に入って来るのである。これも、国民性の相違の現われであろうか。面白く感じたことであった。

さて、美術館に入ってみよう。それはあまりに大きく、その展示品の見事さと数量の豊富さに私はすっかり圧倒されてしまった。ちょうど古代エジプト・ギリシャ展もやっており、紀元前3千年も昔の発掘品が豊富に揃えられていた。私は考古学のことは皆目わからないが、それでも棺、ミイラ、彫刻品等は、何千年も前のものとはとても思えぬほど見事なものである。いったい何点展示されていただろう。とても1時間や2時間でなど見切れるものではない。

それから、絵画も素晴らしかった。作品の1つ1つが私の胸を動かした。キャンヴァスの中の人物は生きているように、今も新鮮である。風景画にしても、自然が生きている。写真のように平面的で冷たい感じがしない。絵の持つ独特の温かさというか柔らかさというのか、作者の心がそのまま絵に伝わっているようで、素人の私でも、見ていて実に楽しいひと時であった。本当にうっとりさせられるひと時であった。それにしても驚くべき収集だ。有名なフランクリン、ワシントンをはじめ、ジョン・アダムズ、ギルバート・スチュアート、アレクサンダー・ハミルトン、……と、大変な数のアメリカの偉人たちのポートレートも展示されていた。ことに、ベンジャミン・フランクリンやジョージ・ワシントンのそれは、私たちの目に馴染み深いものだけに、非常に心を打つものがあった。

ボストンを立ったのは夕方の5時過ぎだった。2日余りの滞在を終えて、再びブラトルポーロへと帰って行った。疲れた体をぐったりとシートにもたせかけて、ボストン滞在の楽しい数十時間のことを思い返していた。疲れた頭の中に思い浮かんだことで、まだ書いていない興味あることがあるので、1つ記しておこう。

コブレイ・スクエア・ホテルは、バス・トイレ・テレビ・クーラー・セミダブル・ベッドのかなりいいホテル（私の滞在中最高）であった。が、ボストンを立つ日、部屋の鏡に白い小さな封筒が挟んであるのに気づいた。はて何だろうと見てみると、それはいわゆるメイドが「心付け」を要求する旨を印刷してある封筒であった。アメリカらしいところを見いだしたのだが、誰かが書いていたように、やはりチップをもらわねばならない人々はそう高い階級ではない。何だかみみっちい感じがその時にはした。しかし、私はその中にクォーター（25セント硬貨）を1枚入れて部屋を出た。

●フェアウェル・パーティ

S・I・Tでの研修も、いよいよ終わり近くになった。ボストンへの旅から帰ってからも、いろいろなことがあった。私のもとにもようやく妻からの便りが届いたこともその1つである。実のところ、私が7月2日に京都を立ったその日まで、ホーム・ステイの家庭が決まっていなかった。もし決まっていたとしても、彼らからは何の便りもなかった。メンバーの中には、すでに早くから便りを受け取っている者もいたし、私のようにまだ何の便りもなく、不安な気持ちに駆られながらアメリカに来てしまった者も何人かいた。ところが、妻からのこの便りによると、私が京都を立ったその日に、家族から便りが届いたらしい。ほんのわずかですれ違いとなったのだった。詳しいことはわからないが、何でも4人家族で、37歳の主人に38歳のワイフ、それに子供は11歳の男の子と9歳の女の子だということだけは確かであった。（その家族の便りは、私がホーム・ステイに入ってから妻が同封して寄越したが）ともかく、ホーム・ステイが決まっているということだけでも知った喜びは大きかった。

それから、アポロ11号の月着陸、人類史上初めて月面に降り立つという快挙をやったのけた宇宙飛行士のことも特筆しておきたい。その成功は、全米を狂喜の渦に巻き込んだようであった。（それは、帰還した3人の飛行士が全米各地で熱狂的な市民の歓迎を受けたことでもわかる。）

さて本題に移ろう。キャンパスを去る日も真近かに迫った7月22日、1日の厳しい研修を終え、夕食が済むと、私たち日本人グループはキャリッジ・ハウスでフェアウェル・パーティを開いて、他の留学生たちを歓迎した。キャリッジ・ハウスは毎日3食を頂く食堂であったほかに、各種の催し物、例えば、毎週水曜日の夜8時から映画会も開かれたりして、私なども往年の名画でゲーリー・クーパー、グレイス・ケリー主演の“High Moon”（『真昼の決闘』）を楽しんだことがあった。そのキャリッジ・ハウスで、この夜は華やかに日本人グループがフェアウェル・パーティを行なったのである。

私は2、3日前の打ち合わせで、他のメンバーから司会をやるように依頼され、引き受けてはみたが、そのような経験もあまりなく、大役すぎるので、ちょっと当惑してしまった。しかし、文を作って読むというようなことはせず、思い切ってぶっつけ本番でやってみることにした。男子も女子も、ホーム・ステイの家族へのみやげの1つである浴衣を着けた。女子の浴衣姿がこと

のほか、日本人の私にさえ美しく見えたのは、彼女らのさした紅のほどの良さと浴衣とが調和して、国際的雰囲気濃厚なこのキャンパスでは人目につく晴れ着であったからだろうか。何だか、明治の時代に（今でもそうだろうが）来日した異人たちが、自分たちにはない良さを発見して嬉々としたあの心境が、ふと日本人である私の中にさえ流れ、彼らの心が理解できたような気がしたのだった。

テーブルは片付けられ、椅子は観客席を形作るように並べられ、すっかり準備の整ったキャリッジ・ハウスは、すでに教師や留学生たちであふれていた。

司会者というのは、堅苦しくはいけない。適当にユーモアをまじえないと退屈がられる。したがって、このパーティを盛り上げようと、私もできる限り英語力を動員させたのだった。ティー・セレモニー、柔道、日本舞踊、生け花、盆飾り、日本の歌などがプログラムの主なもので、各メンバーが工夫をこらして、日本の伝統をできるだけ留学生たちに伝えようとベストを尽くした。私は飽くまで引き立て役で、各演技の前にその内容をわかりやすく説明することに努めた。ティー・セレモニーには茶釜や茶筌、急須、袱紗なども持参されていたし、柔道の型の被露にしても柔道衣を着けての本格的なものだし、舞踊にしても、M夫人など年季の入った人が、荷物になったであろう着物を着て、立派に踊ってくれた。生け花については、石川県の女の先生と私とが生けた。花は、この日の授業が終わってすぐ、事務長のサム（Sam）が快くダウンタウンの花屋まで車で連れて行ってくれ、私の好きな花を買ってくれた。汗をかきかき精魂こめて生けたのだった。生け終わって皆の方に向けると、大拍手が湧き起こった。華道など、中南米の留学生たちには物珍しく、その好奇心が手を叩かせたのだろうが、それにしても私は嬉しさを隠せなかった。カメラを花に向けて一斉にフラッシュがたかれたのには全く驚いたことであった。

踊りでは「阿波踊り」をやったが、やさしいので（本当は難しいのだろうが）、観客席の学生たちまでが一緒に加わった。キャリッジ・ハウスの中は、かなり興奮の色が濃かった。そして最後に、日本の代表的な歌をいくつか合唱したあと、ジムのリクエストで「支那の夜」を一緒に歌った。ずいぶん昔に行ったという日本や満州のことを懐かしみながら、日本語でじょうずに歌うジムの生き生きとした表情が、隣りで歌う私の胸を打った。この時にはジムは、自分の不幸を忘れていたかのようであった。いや、忘れようとしていたのかも知れない。続く“Auld Lang Syne”（「蛍の光」）は、日本語やら英語やらが混じり合った、しかし、リズムは1つの、フィナーレにふさわしい歌であった。すごい拍手喝采で、エドワルドやヴィクトーらキャンパスの友人たちが「エイジ、よくやった、よかったよ！」と駆け寄って来て、私に握手を求めた。その時、私はただ無我夢中でやった大役が終わったことを知り、ホッとした。そして嬉しかった。

大きな声を張り上げ、肩を組み合わせ、興奮の渦巻くキャリッジ・ハウスで歌った「蛍の光」を私は終生忘れることができない。

●ジムへの同情

キャリッジ・ハウスでのフェアウェル・パーティは、大成功のうちに終わった。クライマックスとなった最後の合唱における興奮と陶酔がいつまでも尾を引いて、終わってから心の中に熱いものが繰り返すのであった。

ところでこの日の朝、授業の合間に、ジムが私とS先生を呼び寄せて、「今夜テレビでプロ野

球のオールスターゲームがあるから、パーティが済んだら私の家に来ませんか」と招待してくれていた。そんなわけで、この熱狂的なパーティが済むとすぐ、浴衣のままで彼の車フォルクスワーゲンに乗り込んだ。そして夜のハイウェイを彼の家へとひた走った。コネティカット川を渡ると、もうニューハンプシャー、地方の夜道はさすがに車の数も少ない。

「エイジ、よかったですよ。アナタノエイゴ、イチバン！」と、彼は運転しながら、やや興奮気味に私の司会のことをほめてくれた。彼もまださっきの興奮から醒めていないようであった。途中、小さな食料品店の前に車を止めて、彼は罐ビールを何本か買い込んだ。

ハイウェイを左に折れて黒々と茂る林の中の細道に入り、しばらく走ると彼の家が見えた。A-frame house といって、Aという文字の形をした面白い形の家である。日本でも昨今、別荘地などで時々見かける家だ。しかし、日本人の目にはまだ珍しい部類に入るだろう。

非常に閑静なところである。あたりは林ばかりで、百メートルほど先に1軒だけ隣家が見えるのみである。物音1つ聞こえて来ない。ブラトルボーロの街を外れコネティカット川を渡ってしまうと、ハイウェイの両側に見られるものと言えば、緑の森や草原ばかりで、時々道端に小さなみやげ品や食料品を並べた店が目にとまるに過ぎない。しかも、彼はそのハイウェイからさらに林の奥深く入って行ったところに住んでいるのだから、閑静であるのは当然なのである。それにしても、この時にもやはり国土の広さをひしひしと感じたのであった。

玄関のドアのロックを外して、彼がまず中に入る。暗い……。彼は今や一人者なのだ。手探りでライトのスイッチをつけた時、室内の明るさに比し、彼の顔の表情は何とも言いようがなかった。

彼はすぐにテレビのスイッチをひねった。しかし彼の知ったことは、ゲームが今日はない、ということであった。彼は非常に悔しがった。けれども私にとって、ゲームがあるかないかはどうでもよいことであった。こうして彼と個人的に語らい、少しでも彼の慰めになれば、もうそれで何も言う必要はなかった。彼自身も、やはり同じ気持ちだったのだろうと思う。

ビールを飲みながら、しばらく談笑した。彼は多少英語教育論めいた話や忠告を私たちにした。「日本の、文法ばかりを教えるような方法ではなく、もっと話し聴かせる練習に重点を置くべきです。……」と。

ビールを持って外に出た。テーブルと椅子が2脚——彼の奥さんの——置いてある。数匹の蛍が美しく飛び交っている。黒々とした樹木がいつそう蛍を浮き立たせた。夜空には星が無数に瞬き、詩的でさえあった。彼が癌で亡くした奥さんのことを寂しそうに語るのを聞いていると、過去の回想に耽る老境がもう彼を包み始めているように思われてならなかった。何と言って慰めていいかわからない。ただこうしてしばしの間、彼の話の聞き手になってあげることが私とS先生に成せるすべてであった。人は皆死にゆく……。その時を誰も知らない。わがジムにこれからも幸福と恵みを与えたまえ、と神に祈らざるを得ない。

10時半を回ったので、私たちはもう寮にもどらねばならなかった。もと来た道を彼の車で帰る時、慰めになるどころか、一層私の胸は締めつけられた。

日本に帰ってからも、彼との親交は恐らく続くだろう。ぜひ続けたいものだと思う。(最近受けた手紙によると、彼は大学に行って、修士課程を専攻するつもりだと書いている。)

●ファイナル・イグザム（最終試験）と修了証書授与式

一時急に暑くなって、日本のあの蒸し暑さを思いだしたことが2、3日あったが、その後また涼しい毎日が続き、勉強にも身が入った。そして、7月24日はいよいよファイナル・イグザム（最終試験）が課される日となった。例のミシガン・テスト——ペーパー及びヒアリング——である。厳しいトレーニングに耐えた甲斐があったのか（?）、前者が80点、後者が83点というかなりいい成績をあげることができ、他のメンバーから羨まれた。ともかくこの試験とともに、予定された3週間にわたる研修はすべて終了した。何だか気が抜けたみたいであった。試験の行なわれたドームBの一室から寮のズィーズ・ハウスにもどるキャンパスの道で、なぜか涙が出そうになった。もう明日はこの住み慣れた（?）プラトルボーロと恐らくは一生の惜別をするのだと思う気持ちがそうさせたのだろう。しかし、私は満足だった。少なくともここでのハード・トレーニングが、また私を一步前進させてくれたことだけは確かなのだから。

先日ボストンへ行く前に皆で写した記念撮影の写真ができ上がって来たので、1枚買っておいた。キャンパスの草の上に腰を下ろしながら、ジムにサインをしてもらった。こう書いてあった。“Best of luck. I hope to see you in Kyoto in the not too distant future.”

「2年か3年、いや、多分自分が年老いてしまうまでには、日本にもう1度行きたい。」と漏らす彼であった。

「テストはどうでしたか？」と彼が聞くので、結果を言うと、

「オオ、イチバンデス！」と大声を出して、自分のことのように喜んでくれた。

もう1度本当に彼に会えるだろうか？ 奥さんのいない彼の身边が心残りでならない。自愛して長生きしてほしいと思ったことである。

この日5時過ぎから、日本人グループ担当のドンとボブのうち、ドンが私たちメンバーを全員彼の家に招待し、ディナーをご馳走になった。——そして、これが結局素晴らしい終了証書授与式となった。久しぶりにスーツにネクタイをつけると、何だか窮屈な感じであった。

多人数なので、スクールバスで出かけることになった。州道から少しそれて、山の中に入った茂みの深いところに、小ぢんまりとした居心地のよさそうな家（cozy house と言うのであろう）がたった1軒ぽつんと立っていた。緑濃い林や草に囲まれ、ひっそりとした環境——耳に入って来るものと言えば、小さなせせらぎの音ぐらいで、それが静寂を破る唯一のもの——、そこがドンの一時的住居であった（彼は来年はトルコで過ごすという）。彼には、若くてチャーミングでグラマーな夫人と、非常にかわいいが、やんちゃ盛りの男の子がいて、2人は私たちの到着を待っていてくれた。いつもこんな寂しいところに暮らしているからだろうか、それだけに私たちのような珍しいゲストがやって来ると、余計はしゃぎ回るのであろう。子供はどこへ行っても同じものだとつくづく思う。表の庭の端をせせらぎが流れていて、その清水には罐ビールやコーラの罐がずいぶんたくさん涼しそうに光っていた。

芝生を植え込んだ裏庭には、もうご馳走の用意が整っていた。フランクフルト、ステーキ、サラダ、フレンチフライ、ポテトチップ、それによく冷えたビール、コーラ、ファンタなど、留学生の私たちには豪華版であった。芝生の上に敷かれたカーペットの上に腰を下ろして、皆一生懸命飲み食いしたようだった。私も罐ビールを3本も飲んで、かなりいい機嫌になった。英語部長

のトッド先生，それにボブ，ポール（同じSITの先生）も招待されて来ており，一緒に歌を歌ったり，レコードを聴いたり，ゴーゴーを踊ったりして，とても賑やかなパーティであった。

暗くなる前に芝生の上で，トッド先生から1人1人に修了証書が渡された。彼は私に「素晴らしい進歩です。」と言ってほめ，さらに「今度は一つ，奥さんを連れて，大学に学ばないですか？」などと熱心に勧めてくれたりした。

9時前に迎えのスクールバスがやって来て，「4時間ばかりの時の経過の早さに驚いた。楽しい時間の経過というのは，つねにいつも早いものである。それにしても，きわめてユニークで，アイデアに富んだこの日の終了証書授与式であった。